

派遣期日 平成28年11月11日(金)
研修先 静岡大学教育学部附属島田中学校
所在地 静岡県島田市中河町169番地

<http://fzk.ed.shizuoka.ac.jp/shimachu/>

研修内容

平成28年度 第62回教育研究発表会
研究主題 「主体性を高める授業課程」
音楽科テーマ「無意識的感受を意識化する音楽授業づくり」

(1) 研究の基本的な考え方

静岡大学教育学部附属島田中学校では、昭和34年度から研究主題を「主体性を高める授業課程」とし、それぞれの時代において求める生徒像を「主体性ある人間」として設定し、研究活動を進めてきた。主体性ある人間とは、様々な状況や場面において、自己と集団・社会・ものとのかかわりを意識しながら、

○自己や集団にとって価値あるものや課題を見付けだす

○自己や集団の取るべき行動を決定し、実践する

○自己や集団の決定や行動を振り返り、評価し、改善する

これらに、継続的に取り組むとともに、自己や集団を高め続けるよう努力する人間のことであり、としている。

(2) 教科テーマとこれまでの取り組み

島田中学校では、音楽科で育てたい生徒像を、多様な音楽表現を感じ取り、音や音楽への興味・関心をもち、主体的に音楽に関わろうとする生徒としている。いつも耳にしている言葉そのものを「無意識」ではなく、「意識」することによってさまざまな学びが深まり、そして感性が磨かれることを通じて、豊かな情操を味わうことができると考え、テーマを「無意識的感受を意識化する音楽授業づくり」と設定している。

一昨年、昨年度と長唄を教材として取り上げ、「飴売り」や勧進帳より「旅の衣はずずかけの」「これやこの」などを唄う活動を行った。長唄は、発声や言葉のかかわりなどの特徴を理解したり、姿勢や身体の使い方を配慮したりすることが大切である。

活動において、意識することのなかった日本語特有の響き(言葉のまとまり、リズム、抑揚、アクセント、発音など)を、さまざまな活動を通して意識化できるようになったことで、日本の伝統や文化の理解、長唄の特徴や魅力の発見から、伝統音楽を以前より身近に感じられるようになった。

(3) 実践内容

学級 3年A組(音楽)

授業者 小林優樹先生

題材名 Let's know 能!

教材 能「羽衣」から

目標 手本の謡から、どのような工夫をすればいいか考えたり謡ったりする活動を通して、「間」や「声の音色」を意識した表現で謡うことができる。(音楽表現の創意工夫)

指導計画(6時間扱い) 本時は第5時

題材設定の理由

昨年度までの研究実践を生かして、「言葉」と「響き」を基盤とした総合的な音楽的要素の獲得をめざした実践を重ねるため、日本の伝統芸能である能の謡に挑戦する。謡う活動を通してさまざまな視点から、発音、リズム、間、時代背景など長唄と謡の違いや特徴を考えさせ、昨年度までの学びをもとに意識化へとつなげるため、本題材を設定した。

授業過程

学習活動	支援及び留意点 ◎評価	形態・時間
○前時の復習をする。 ・全員で合わせて謡うことができない。 ・声を揃えることができるようになってきた。 ○「羽衣」キリを謡う。 「羽衣」キリを完成させよう！	・前時の練習で、難しかったところや謡えなかったところを挙げる。 ・ＣＤに合わせて練習する。	一斉 ５分
○ゲストティーチャーの謡を聴き、完成に近づける。 ・声の出し方が全然違う。もっと、おなかから声を出した方が良い。 ・伸ばしているときの声（母音）がしっかり聞こえてきた。 ・息を吸うタイミング（間）が難しいから、もっと地頭と呼吸を合わせよう。 ○「間」の練習をする。 ・エアー鼓があると、どこで謡が入るか分かりやすい。 ・息を吸うタイミングがとれてきた。 ○実際の演奏を聴く。 ・声の出し方からすごい。言葉の響きも感じられた。 ・能楽と日本文化のつながりや奥深さについて知ることができた。 ○振り返りをする。 ・「間」を意識するために、隣の人の息づかいを意識しながら謡った。 ・本物の謡を聴くことで、声の出し方がわかってきた。また、物語の情景を思い浮かべたりしながら謡うことができた。	・ゲストティーチャーの謡を録画して、どの班も同じ映像を見ながら練習をする。 ・各グループで工夫するところを共通理解し、班全員が同じ意識で謡うようにする。 ・必要であればＩＣレコーダーを使う。 ・謡を聴いて感じたことをワークシートに記入し、自分の演奏に活かす。 ・ゲストティーチャーに演奏や楽器についての説明をしていただく。 ・姿勢や声の出し方、発声方法を意識して聴く。 ◎「間」や「声の音色」を意識した表現で謡うことができたか。（創意工夫）	小集団 ２５分 一斉 ５分 個人 １０分 個人 ５分

感想

今回の授業実践では、ゲストティーチャーとして、プロの能楽師の方を６名招いて、実際に「羽衣」キリを目の前で実演していただいたことにより、生徒たちから主体的意欲を引き出すことができ、迫力ある演奏に感銘を受ける生徒たちの生き生きとした様子を見ることができた。また、その後のワークショップにおいて、私たち参観者も能楽師の方々に手ほどきを受けながら実際にキリを謡うことができた。

我が国の伝統音楽についての指導を行う際、現状では教師自身の体験不足から、どうしても生徒たちには知識のみを教え込む指導に陥ってしまっている。公立学校でゲストティーチャーを呼ぶことについては、それぞれの実態があるため難しいこともあるかと思うが、ＩＣＴ機器の活用や、授業形態の工夫の仕方など、自分の勤務校での実践に生かせることがたくさんあった。日本の伝統芸能について、生徒たちに関心をもたせるために、まずは教員である自分自身が伝統芸能について実際に学び、楽しみ、その素晴らしさを感じることが大切だと感じた。研修で学んだことを生かし、日々の授業をより充実したものにしていきたい。